

# 平成18年度病害虫発生予報第7号

平成18年8月24日  
鳥取県病害虫防除所

## 予報の概要 [参考]

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病(穂いもち)	-	少ない
		紋枯病	-	平年並
		トビイロウンカ	-	平年並
		斑点米カメムシ類	-	やや多い
果 樹	ナ シ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	やや早い	やや少ない
		カメムシ類	-	やや多い
野 菜	トマト・ミニトマト キャベツ・ブロッコリー イチゴ	ハスモンヨトウ	平年並	平年並
		ネギ・ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平年並

## 気象予報(抜粋)

1か月予報(8月19日~9月18日:8月18日、広島地方气象台発表)  
向こう1か月の気温は高く、降水量と日照時間は平年並でしょう。

<可能性の大きな気温経過>

期 間	平均気温
8月19日 ~ 25日	高 い
8月26日 ~ 9月1日	平年並か高い
9月2日 ~ 15日	平年並か高い

## 普通作物

### [イ ネ]

#### 1 いもち病(穂いもち)

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 少ない

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、葉いもちの発生は県下全域で見られているが、発生ほ場率は11.2%(平年:33.8%)と、平年に比較してやや少ない発生となっている。

イ 梅雨明け以降の好天により、全般に葉いもちの病斑進展は緩慢となっており、穂いもちの発生は少ないと思われる。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

中生品種、遅植等で出穂期～穂揃い期を迎えている地域では、出穂前後の防除を徹底する。

2 紋枯病

( 1 ) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、発生ほ場率は29.2%（平年：41.6%）と平年に比較してやや少ない発生となっている。

イ 8月21日現在、県予察ほ場における発生は、平年並となっている。

ウ 梅雨明け以降、本病の発生に好適な気象条件が続いている。また、気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本病の発生に好適である。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

残暑などにより病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、粉剤等により追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

( 1 ) 予報の内容

発生地域 県下全域（特に沿岸部）

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 8月第2半旬現在、予察灯への誘殺数はやや少ないが、県下全域で予察灯への誘殺が確認されている。また、一部ほ場においても発生が確認されている。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生に好適である。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 現在、防除が必要なほ場は認められていないが、ほ場間差が大きいためほ場の生息密度には注意する。

イ 8月下旬以降の防除の目安は、1株当たり10頭以上とする。

4 斑点米カメムシ類

( 1 ) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや多い

( 2 ) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、ほ場での発生は平年並である。イネ科雑草地での発生は平年よりやや多い。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本虫のイネへの加害には好適な条件と見込まれる。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生の多い場合には、7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。なお、防除は地域一斉で行うと効果が高い。

- イ 中生品種、遅植等で出穂期～穂揃い期を迎えている地域で、出穂20日前頃に水田周辺のイネ科雑草地・畦畔などの草刈りを行っていない場合には、穂揃い期～乳熟初期に草刈りを行い、直ちに薬剤による防除を行う。
- ウ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので直ちに取り除く。
- エ 要防除水準の目安は、捕虫網50回振りすくい取り調査で4頭以上とする。

## [ダイズ]

### 1 紫斑病

#### (1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

#### (2) 予報の根拠

- ア 大豆の開花期は平年並となっている。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除に水和剤を用いる場合は、アミスター20フロアブルの3,000倍液に、カメムシ類の防除剤および展着剤を加用し、開花期の25～30日後に1回、150～300g/aを散布する。粉剤を用いる場合は、マネージトレボン粉剤DLを開花期の25～30日後に1回散布する。

### 2 ハスモンヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	やや少ない

#### (2) 予報の根拠

- ア ダイズほ場では、平年よりやや早い8月第1～第2半旬に幼虫の発生が認められた。
- イ 8月第4半旬現在、フェロモントラップによる誘殺数は少ない。なお、8月第2～第3半旬に成虫発生ピークが認められており、8月下旬以降、幼虫による被害が増加すると予想される。
- ウ 8月14日現在、発生ほ場率は30.6%（平年：48.5%）、平均白変葉か所数は0.1か所/a（平年：0.5か所/a）と平年より少ない発生となっている。
- エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量と日照時間は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、防除指針等を参考に防除を行う。
- イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察に当たっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。
- ウ 若齢幼虫に対する防除薬剤の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が劣るため防除適期を失しないようにする。  
 なお、中～老齢幼虫が混在する場合は、ロムダン粉剤DL、ミミックジョーカー粉剤DL、マトリックジョーカー粉剤DL等を散布すると比較的効果が高い。

### 3 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 8月14日現在、本ほではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの発生がみられ、発生ほ場率は50.0%（平年：42.6%）、25株当たり平均成幼虫数は1.2頭（平年：1.4頭）と平年並の発生となっている。

イ 8月第2半旬現在、予察灯における誘殺数は平年並となっている。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 近年、9月以降にカメムシ類の密度が急増する傾向がみられるので、今後の発生状況に十分に注意する。

イ 防除指針に従い、若莢期にあたる開花期の25～30日後と、その10日後に薬剤を散布する。その後も発生が多い場合、幼虫の密度が再び増加する9月上中旬頃に追加防除を行う。

## 果 樹

### [ナ シ]

#### 1 ハダニ類（カンザワハダニ，クワオオハダニ，ナミハダニ）

##### (1) 予報の内容

発生量 やや多い～多い

##### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場におけるカンザワハダニの1葉当たり寄生成虫数は、0.01頭（平年：0.05頭）でやや少ない。一方、ナミハダニの1葉当たりの寄生成虫数は1.1頭（平年：0.02頭）と多く、クワオオハダニの1葉当たりの寄生成虫数は0頭（平年：0.0頭）で平年並の発生となっている。

イ 現地のナシ園では、ハダニ類の密度が高く、葉焼け症状を呈しているほ場が散見される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されており、ハダニ類の増殖に好適である。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、枝を洗うように丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤の効果が異なるので、種類を十分に見極める。

また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ 本年は、東中部はナミハダニ、西部はクワオオハダニの発生が目立っている。特に、ナミハダニの場合、新梢葉や果そう葉が変色したあとで多発生に気がつく場合が多いので、ほ場の観察を怠らないようにする。

ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを、クワオオハダニには前述の剤に加えて、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを使用する。なお、薬剤の散布にあたっては、収穫期が近づいているため、農薬の使用基準を遵守する。

## 2 シンクイムシ類（平成18年7月12日付，病害虫発生予察注意報第3号発表）

### （1）予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い～多い

### （2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、ナシ園設置のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数はほぼ平年並である。

イ 現地の一部のナシ園では、ナシヒメシンクイによる果実被害が認められている。

ウ 8月中旬現在、県予察ほ場のウメ園に設置したナシヒメシンクイのフェロモントラップにおける誘殺数は急激に増加しており、今後、ナシ園への飛来が懸念される。

エ これまでの発生経過から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は平年並の8月中～下旬と見込まれる。

### （3）防除上注意すべき事項

ア 収穫前の防除を徹底する。特に、昨年被害が多かった地域では、本年も被害発生が懸念されるので注意する。

イ 薬剤は少発生園ではDDVP乳剤1,000倍液などを、多発生園ではアグロスリン水和剤2,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

## 野菜

### 〔トマト、ミニトマト、キャベツ、ブロッコリー、イチゴ〕

#### 1 ハスモンヨトウ

##### （1）予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

##### （2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるフェロモントラップでの誘殺虫数は平年並であるが、幼虫の食害量はやや少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、今後平年並の発生量が見込まれる。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生や食害がみられた場合には直ちに防除を行う。

イ トマトおよびミニトマトでは若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

ウ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはアファーム乳剤1,000～2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

エ ブロッコリーでは、PAP乳剤（エルサン、パプチオン）1,000倍液、カスケード乳剤4,000倍液などを散布する。

オ イチゴ苗床では、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ラービフロアブル1,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、アファーム乳剤2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

## [ネギ、ナガイモ]

### 1 シロイチモジヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるフェロモントラップでの誘殺虫数は平年に比べてやや少ない。

イ 県予察ほ場のネギおよびナガイモほ場における幼虫の被害は、平年に比べてやや少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、今後平年並の発生量が見込まれる。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 若～中齢幼虫の発生盛期は9月上旬になると予想されるため、この時期の防除を徹底する。

イ 防除は若齢幼虫期に行う。これを逃すと防除が困難となる。

ウ ネギではランネート45DF1,000倍液、ハチハチ乳剤1,000倍液、アファーム乳剤1,000～2,000倍液などを散布する。

エ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を5～7日間隔で2回程度防除を行う。

## [おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。（<http://www.acis.go.jp/>）

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

### < 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、フェロモントラップ調査結果、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL：0857-53-1345、FAX：0857-53-5647

E-mail：byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回の予報発表は、9月7日（木）の予定です。